

『おねーさんの耳はロボの耳』 第一話

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

0. H M X 13 型

外見設定は十八歳前後の女性。体型はややスレンダーで長髪。ちなみに、体型はある程度の変更が可能。

主な仕様として、通信衛星との直接リンクを可能とした送受信装置を内蔵。来栖川が提供するデータベースにアクセスすることが出来る。

身体的能力は反射速度・筋力ともに十代女性なみ。また試作モデルはあらゆる用途を想定しており、特別モデル用の特殊装備も実装。

なお、衛星リンクを実現しているが、本体からの送信の際には、長時間の単体での動作は勧めない。これは送信出力確保によるバッテリー過負荷の恐れがあるためで、送信機専用の別電源を用意した方が好ましい。

特記事項として、H M X 12型に搭載された感情制御システムのサブセットを導入。感情表現は機構および予算により制限されたが、内部的には擬似的感情を持ち、使用者に対するきめの細かな対応を可能とした。

これがH M X 13型「セリオ」だった。

高機能モデルとして設定されたHMX13型は、最終テストの後に解体されて、各部のデータと感情制御プログラム・データが研究所のコンピュータに残るのみとなった。

HMX12型が引き続き感情制御システムの研究を行うことになったのと比べ短命と言えば短命だが、試作型としての寿命は本来その程度のものだ。試作型に必要なのは、あくまでも多岐に渡るテスト項目とその結果だけであって、試作型そのものにこだわる必要はないのだから。

HMX13型に搭載された感情制御システムは、HMX12型のような細かな表情変化や感情に伴う反射的行動が出来るような物ではなかった。本来は感情制御プログラムとそれに伴う動作を実現する機構を含めて感情制御システムと称するが、HMX13型は感情制御システムではなく感情制御プログラムを導入されたに過ぎない。

だから、HMX13型は泣くことも、大笑いすることも、恥ずかしがることもない。したくても、出来ないのだ。そのための機構を持っていないがために。

1. 改造命令

HMX12型の開発責任者である長瀬があることに気付いたのは、二つの新型が市販されてからだった。

市販されたHMX13型の仕様書と、HMX13型の仕様書とを見比べていると、感情制御の部分についての表現が変わっているのだ。

HMX13型は「あらかじめ設定された性格に従って、使用者に対するきめの細かい対応をとれます」となっているが、HMX13型では、この「あらかじめ設定された性格」と言う

言葉はない。基本的に感情制御は学習型のはずで使用者が自分なりに変えていくことが出来るはずだった。現にHMX12型はそうなっている。

しかし、このHM13型の作業は自分の部署ではないこともあって、長瀬はそれ以上の追求をしなかった。ただ、HMX13型の感情制御プログラムとデータの処遇が頭の中に引っかけた程度だった。

そして、しばらく後。

長瀬がHMX12型の経過を報告するために、米栖川エレクトロニクス本社を訪れた時のこと。

彼に一つの指示が下った。

「HM13型にHMX12型同等の感情制御システムを組み込むこと。そのためHMX13型本体と各周辺装置を長瀬の部署に移管。なお、実践テストはHMX12型が行っている環境と同等にすること、感情制御システムによりHM13型本来の機能を損ねることのないように」

この指示に対し長瀬はその目的を尋ねたが、明確な答えは得られなかった。

ただ、本社役員からの指示であること、その先に更なるVIPがいることだけをほめかされただけだった。

いずれにしても一研究所の主任に過ぎない長瀬に、それを拒否することは難しい。長瀬自身は自分がどうなるかが気になる性格ではないが、部下たちにまでとばかりが行くのは嬉しくない。

こうして、その指示をひとまず受けるのだが、長瀬は長瀬なりにこれを絶好の機会と

らえていた。

研究所への帰途、長瀬の様子はいつもと変わらぬものだったが、その心の内ではほくそえんでいた。

その翌日。

「何ですか、これは…」

一人の若い男が書類を一瞥して、やや呆れた口調で言った。

「セリオじゃないか。そんなことも忘れたのかい、君は…」

呆れ顔で尋ねる男の質問をさらっと受け流すように答えたもう一人の男。

「いや、だから、何でセリオがここにいるんですか、長瀬主任っ」

若い男がやや口調を荒げて、長瀬に食ってかかる。だが、

「やれやれ…。だから、さっき説明したじゃないか…山本君も物忘れが激しいねえ」

と当の本人は飄々としたままだ。

「…あれって、冗談じゃなかったんですか」

「ははは、冗談だったら、ここにセリオがいるはずないでしょう？」

のんきに笑う長瀬。

対照的に額に青筋を立てる山本。

「…長瀬主任、あなたって人は一体…」

山本の独り言のようなつぶやきに、長瀬は笑って答える。

「だって、マルチだけじゃ面白くないだろ？ せっかくだからあの子の身内を作ってやりたいじゃないか」

「……」

明るく笑う長瀬を横目に、山本はただ言葉を失うのだった。

ことの始まりは数日前にマルチと浩之がやって来た時の会話だった。

何気なくマルチが口にした言葉——「セリオさんはお元氣ですか？」

この一言に山本は答えることが出来なかったが、長瀬は違った。

にやりと笑ってから、マルチに聞き返す長瀬。

「あの子に会いたいかね？」「はい」

間髪入れずに返されたマルチの返事を聞いて、

「そのうち会えるようにしてみよう」

と長瀬は答えたのだ。もちろんマルチは手放しで喜んでいた。だが、その時点でセリオは解体されていたことを山本は知っていただけに、複雑な面持ちで長瀬を、そして嬉しそうにしているマルチを見つめるだけだった。

それからしばらくの後。

長瀬がHMX13型の開発チームの主任と何やら相談ごとをしてるらしいとのうわさを小耳にはさんだ。さらに、何か勝負ごとをしているらしいとも。

そして、その結果が今、山本の目の前にあると言うわけだ。

「だから、彼と賭けをして勝って、そのツケにこの子をもらってきた……。昨日そう説明したでしょうに」

「てっきり冗談かと思ってたんですけどね、私は」

「馬鹿言っちゃいけないよ。こう見えても冗談は嫌いなんだから」

「…それこそ、最低の冗談ですわね」

「と、まあ、それはともかくとして。ちゃんと購買の方も手配してあるから何も問題はな
いんだよ。これは例のプロジェクトの一環でもあるんだしね」

本当の理由は本社の指示なのだが、長瀬はあえてそれを隠していた。理由はどうあれ、
セリオの感情制御システムを改造することは変わりはないのだから。

「そうですか…。それを聞いて安心しました」

「君は真面目過ぎるよ、山本君」

「それで、これをさっきの仕様書に合わせるんですわね？」

苦笑する長瀬をよそに、山本はさつきと話題を切り替えて行く。この辺が長瀬をして
「真面目」と言わしめる原因なのだが、当の山本は全然気にしていない様子だ。

「そうだねえ」

「性格設定はどうしますか？ 基本はちゃんとした物があるようですが…。一度セリオ自
身に確認してみますか？」

「ああ、教育は私がするから、君は他の細かな調整をやってくれないかな？」

「主任が…ですか？」

山本は長瀬の言葉に驚きを禁じ得なかった。まさか自分からやりだすとは、いかにも長
瀬らしくない。

「うん。マルチは君が教育したからね。また君にやらせたんじゃないやあ、面白くないだろ
う？」

「面白くないって…そう言うもんですか？」

『おねーさんの耳はロボの耳』第一話

「幸いにしてセリオの感情制御はほとんど成長していない。平たく言えば全然すれてないからねえ。これはあのチームが他のことに気を取られていたのと、さすがにお嬢様学校の賜物と言うところだね」

「それはそうですが…」

「まあ、任せておきなさい。それよりも君は感情制御の外部動作部分の改造を進めてくれないか？」

「はあ…分かりました。それで、どの程度までやりますか？ もともとの設計からそうならないから、全部マルチのようには出来ませんけど」

マルチのコストの大半は細かな表情変化の挙動と感情制御に消費された。本来そのような設計をされてないセリオには、すべてマルチと同様に表現させるのは至難の業である。

「顔の表情と涙は必須だな」

「…鼻水は？」

「そりゃ、セリオには似合わないだろう？」

「ごもっともですね」

「それじゃ、頼んだよ」

言いような不安を秘めながら、こうしてセリオの改造が開始されたが、その時山本が感じた不安は遠からず現実となってしまうのだった…。

『おねーさんの耳はロボの耳』第一話

2. マイ・シスター！

のんびりとした日曜の午後。

浩之はマルチの入れてくれたコーヒーを飲みながら、ビデオ鑑賞にふけていた。もちろん、傍らにはマルチの姿がある。

観ていたのは恐怖映画の類だったが、何も動じない浩之とは違って、マルチは時折目をつぶっていたりしていた。

「マルチって怖がりなのか？」

浩之がそう聞くと、マルチは恥ずかしそうにして答える。

「えっ…、変…ですか？」

「いや、そんなことはないぞ。それくらいの方が可愛いつてなもんで」

「…それじゃ、恐がりのままでいますね…」

とマルチが答えた時だった。

“ピンポーン”

玄関の呼び出しチャイムが一度だけ、来客を告げた。

「あ、お客様ですね」

すぐそれに反応して、マルチが立って出ようとするのを、浩之は腕をつかんで止める。

「いいよ、こんな日に来るのはどーせろくでもない新興宗教の勧誘か、訪問販売の類だろうからな」

「え…でも、出てみないと…」

戸惑いをあらわにするマルチの腕をつかんだまま、浩之が続ける。

「いーんだってば。せっかくマルチとのんびり過ごしてるのを、変なやつらに邪魔されたくねーしな」

「はい…それじゃあ」

と言って、浩之の言葉に従うべくマルチがまた腰をおろすと、

「そーそー。誰も出なきゃそのうち諦めて帰るさ」

と浩之は答え、またのんびりとした時間を満喫すべく、マグカップに手を伸ばした。

「はい…」

わずかに釈然としない様子のマルチをよそに、浩之はまた自分の世界に入り込もうと言
う時。

“ピポピポピポピポピポピポピンポーン”

呼び出しチャイムがけたたましく鳴り出した。

「げっ！ 一体何だよ。立て続けに押ししてるから、“ピンポーン”の“ピン”の部分が重
なってるしよお…」

「あの…そんな擬音語の説明してる場合なんですか？」

「うっ…マルチに突っ込まれるとは……」

マルチにツツコミをやられた浩之は複雑な心境だったが、今はとりあえず騒音の元を断
たねばならない。

「ま、とにかく蹴散らしてやるかあ…。今時『ピンボンダッシュ』なんてやる馬鹿もいな
いと思うけどな」

「あの…それって何ですか？」

『おねーさんの耳はロボの耳』第一話

マルチがおずおずと質問をしてきたが、浩之はそれに答えずにただ苦笑しながら、「ま、また後で説明するよ」

と言った。そして、そのまま玄関に向かう。だが、その心中では、どうも最近マルチに突っ込まれることが多くなつたような…と感じていた。

“ピポピポピポピポピポピポピンポーン”

だが、相変わらずチャイムは鳴り続けている。まるで親の敵でも討つかのように「ええい！」と言つた気合いすら感じてしまうほどだ。

「だあああ！ 今出るよ…つとにしつこいなあ」

と浩之が叫びながら玄関のドアを開けると、そこには…

「いるのは分かつてたんだから、早く出てちょうだいよね」

と口を尖らせた一人の女の子の姿があつた。

「……………」

だが、浩之は何も答えなかつた。

そして、浩之の後ろから玄関の外にいる女の子の姿を確認したマルチが一言。

「あ……………」

その女の子もマルチの姿を確認したらしく、マルチに向かってにっこりと微笑みながら、

「マルチ、久しぶりねっ！」

と挨拶をした。

だが、浩之は未だに状況が飲み込めなかつた。

何故？

『おねーさんの耳はロボの耳』第一話

この子がここに？

いやいや、何でこんな風になってるんだ？

これじゃあまるでマルチみたいなの……。

その女の子の耳には…大きな「耳飾り」がついていた。それは、間違いないく

メイドロボの証拠。

それに、見覚えもある。最近によくあちこちで見かけるタイプには違いない。

だが、

何故それがウチに？

まして、この笑い方や喋り方は？

とどめに、マルチに対して「久しぶりねっ！」だと？

「セ、セリオ？……」

「あら、名前が出るまでに時間がかかるのは老化の始まりよ、浩之さん」

どもりながら浩之が名前を呼ぶと、女の子はくすつと笑いながら、そう答えた。

そう、浩之の家にやって来て、けたたましくチャイムを鳴らしたのは、かつてマルチとともに最終テストを行った、あのセリオだった。

「セリオさん、本当にお久しぶりですね〜」

嬉しそうにするマルチと、名前を言ったきり言葉を失った浩之。

そして、マイベースのセリオ。まさに三人三様である。

「マルチも幸せそうでよかったわ。あ、そうそう。これからわたしもお世話になる

『おねーさんの耳はロボの耳』第一話

からよろしくね、マルチ」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願いします」

マルチがぺこりと頭を下げ、挨拶をしようと、セリオは満足げにして言う。

「それじゃ、これからはわたしはマルチのおねーさんね」

「はあ、そうなんですか？」

「型番で言ったらあなたの方が先だけど、わたしの方が年齢設定が高いから」

「はい。それでは、セリオさん、よろしくお願いします」

わけの分からない展開になっているにも関わらず、セリオの言うがままを受け入れてマルチがぺこりとあいさつをすると、すかさずセリオの訂正が入る。

「セリオおねーさんと呼んでちょうだい」

「はい、セリオおねーさん」

「それにしても、居留守はだめよ、マルチ」

「は、はあ……」

「隠れてても声を潜めてても、このわたしのセンサーにはちゃんんと反応してるんだからね」

「凄いですね、セリオさんは」

「セリオおねーさん」

「はい、セリオおねーさん」

とにこやかに会話を弾ませている二人の脇には、石像のごとく動かなくなった浩之の姿があった。

「あ、浩之さん。後でそこに置いてある荷物を入れてくれませんか？」

とセリオがにこやかにお願いすると、ようやく反応を返す。

「な、なにい？ 荷物を運べだあ？ 何で俺が！」

「わたしは普通の女の子程度の力しかないの。だ・か・ら…お願いね」

「うっ……」

普通の女の子にはそんな耳はない…。そう言い返したかったが、それは出来なかった。

何と言ってもマルチだって力はないのだ。

「…分かったよ。持ってやるから、とにかく上がってな」

「ありがと。だから、浩之さんって好きよ」

「なっ…」

明るい表情でセリオが言った後、再び浩之は完全に言葉を失った。

（変われば変わるものだ…。あの落ち着いた雰囲気の子が、ここまで明るい女の子になるとはね。これからのことが思いやられるな…）

と考えながら、さっきセリオが言っていた荷物を取りに行こうとして、またまた浩之は石化してしまった。

「……………」

もはや言葉もなく、ただ呆然とその荷物の前に立ち尽くすだけだった。

その荷物とは、セリオ専用の周辺機器の山だったのだ。

シングルベッドサイズの収納架。大型テレビ並みの予備電源装置。そして制御用のコンピュータは、マルチのような小型の物ではなく大きな筐体のセットだった。

『おねーさんの耳はロボの耳』第一話

(……これをどうやって運べと?)

荷物の前で途方に暮れる浩之の耳には、時折吹いてくる風の音だけがむなしく響いていた。居間で楽しそうに会話しているマルチとセリオの笑い声もまったく届いてはいなかった。

(続く)

『おねーさんの耳はロボの耳』第一話

初版:1997/06/16

第二版(PDF化):1998/07/28

(PDF書式変更):1999/11/06

PDF書式変更:2016/05/07